

## 既定情報の否定

### — 英語の{It is not that / Not that}節構文と「のではない」構文 —\*

大竹 芳夫 言語教育講座

キーワード: It is not that 節構文, Not that 節構文, 「のだ」構文, 名詞節化

#### 1. はじめに

談話で頻用される(1)の斜体部を含む英語構文は、先行する事柄に関する聞き手の誤った解釈を話し手が予測し、明確に否定するのに用いられている。

- (1) a. My father was actually the chairman of the local Conservative Association, so, as you can imagine, he had pretty definite views and rather strong political ambitions. *It's not that* he was lacking in compassion for other people at all — he was actually a very nice, kind man.

(*The Times Magazine*, Feb. 5, 1994)

(私の父は実際に地方の保守党議長だったので、ご想像の通り、定見とかなり強い政治的野心がありました。父は他人に対する情けを全く欠いていたのではありません — 父は実際にとってもやさしく親切な人でした)

- b. News that does not make the heart sing: the Victoria & Albert Museum is to dedicate an exhibition to Kylie Minogue, featuring 200 costumes and accessories. *It is not that* I don't think that fashion can also be art. But Kylie's clothes? Cute and peachy as her bottom undoubtedly is, she is not, and never has been, at the cutting edge of design.

(*The Observer*, Oct. 29, 2006)

(胸を高鳴らせないニュース: Victoria & Albert Museum が 200 点の衣装とアクセサリを目玉とする Kylie Minogue の展覧会を開催する。私はファッションも芸術になり得ると思わないのではない。でも Kylie の衣類でしょう? 彼女のズボンに可憐ですてきだけれども、彼女は現在も、そしてこれまでもデザインの最先端ではないのだ)

(1a)の It is not that 節構文は、父親が政治家であるという情報から、聞き手が父親を冷淡な思いやりのない人間であると解釈する可能性を予め打ち消している。(2b)の It is not that 節構文は、あるアパレルメーカーの展覧会開催が胸を高鳴らせないニュースであると伝える話し手の言葉から、ファッションが芸術にもなり得ると話し手が考えていないと聞き手が解釈するのを見込んで否定している。これらの例が示すように、It is not that 節構文において

\* 本研究は、平成 18-20 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 18520377 「日英語における名詞節化形式と意味・機能の関係に関する実証的・理論的研究」(研究代表者: 大竹芳夫) の研究成果の一部である。

否定を受ける命題は、先行情報から聞き手の念頭に成立すると話し手が予想する命題情報である。興味深いことに、It is not that 節構文の文頭部分の it is がしばしば表面に現れない現象が確認できる。(2)の斜体部を含む Not that 節構文では主題要素の it と be 動詞が表示されておらず、基本的に主題表示が義務的な英語においては有標な構文であると考えられる。

- (2) a. Pulling the phone over to the edge of the table, Sterling wanted to finish work for the day before he indulged in dinner. *Not that* he found work a burden. Quite the contrary. Sterling loved his current employ, especially considering that he didn't have to work at all. (R.Cook, *Terminal*)

(テーブルの端まで電話を引っ張り、Sterling は夕食を楽しむ前にその日の仕事を終えたいと思っていた。彼は仕事が負担だと感じていたのではない。事実は正反対だった。Sterling は今の仕事を大変気に入っていたし、まったく仕事をする必要がないと思っていたのだ)

- b. I wished I had a glass of water. The room was hot and my throat was dry and the whisky had left a terrible taste in my mouth, *not that* it was bad whisky; it was actually quite good, but I had a hangover and I hadn't eaten all day, and I felt, all at once, very nauseous.

(D. Tartt, *The Secret History*)

(私は水を一杯飲みたかった。その部屋は暑く、私はのどが渴いていたし、ウイスキーのひどい味が口の中に残っていた。そのウイスキーが不味かったのではない。そのウイスキーは実際には上等なものであったが、二日酔いで朝から何も口にしておらず、急にむかついたのだ)

(2a)の Not that 節構文では、話し手が「Sterling がその日の仕事を終えたいと思っていた」という事柄が「彼が仕事を負担だと感じていた」という解釈と結びつくことを打ち消しているし、(2b)では「ウイスキーのひどい味が口の中に残っていた」という発話内容が「そのウイスキーが不味かった」と聞き手に解釈されることを予測して直ちに否定している。相手の誤った解釈を先回りして打ち消す構文は日本語においても観察される。すでに(1)-(2)の英語に付した対訳の日本語から明らかのように、「父は他人に対する情けを全く欠いていたのではありません」(=1a)、「私はファッションも芸術になり得ると思わないのではない」(=1b)、「彼は仕事が負担だと感じていたのではない」(=2a)、「そのウイスキーが不味かったのではない」(=2b)の「のではない」構文がその例である。従来の研究では、英語の It is that 節構文や Not that 節構文が対応する日本語の「のではない」構文と統一的視点から比較対照されてはこなかったように思われる。話し手が提示する情報に対して聞き手の念頭に成立する解釈を推察し、それを打ち消すときに、日英語の表現形式にはどのような共通性と個別性が認められるのであろうか。本研究では It is that 節構文と Not that 節構文に関して Otake (2002)、大竹(1994; 2003; 2007)で明らかにされた知見をふまえながら、日本語の「のではない」構文の意味的、機能的特性を明らかにする。

## 2. {It is not that / Not that}節構文の意味特性

従来の研究は、It is not that 節構文や Not that 節構文が対照強勢を伴って相関的に用いられるという談話上の特性には着目しているが、談話の冒頭では用いられずに何らかの先行情報を契機として発話されるという重要な特性については目を向けていない点で不十分な分析であった。

- (3) a. *It was not that* John protested; it was rather that he was rude.

(Quirk *et al.* 1985)

(John は異議を申し立てたのではなくて、むしろ彼は無礼な振る舞いをしたのだ)

- b. *It's not just that* she's young; *it's* {surely/more} *that* she's inexperienced.

(*ibid.*)

(彼女は若いだけではないのだ。あきらかに彼女には経験がないのだ)

Quirk *et al.* (1985)は(3a-b)のような例を挙げて It is not that 節構文と It is that 節構文との相関性に言及している。しかしながら、大竹 (1994)ですでに指摘したように It is not that 節構文は必ずしも It is that 節構文を同一談話中に必要とはしないこと、実際の談話では(1a-b)のように聞き手の解釈を否定する契機となる先行情報が存在しなければならないことを説明に反映していない点で Quirk *et al.* (1985)などの先行研究には問題があるように思われる。It is not that 節構文は It is that 節構文の否定形であると考えられる。It is that 節構文は Otake (2002)、大竹 (2003; 2007)で考察したように、先行情報が話し手の知識に取り込まれていることを指示表現 *it* で積極的に表示したうえで、その情報を自分のもち合せている知識と関連付けて同定し、解釈することがその基本的な意味である。その否定形である It is not that 節構文には It is that 節構文の意味的、機能的特性がそのまま引き継がれると考えられる。つまり、It is not that 節構文は、先行する事柄に関する聞き手の誤った解釈を予測し、明確に否定するのに用いられる。前節の(1a-b)は It is not that 節構文のこの特性を端的に例証している。さて、It is not that 節構文において否定を受ける命題は、先行情報から聞き手の念頭に成立すると話し手が予想する命題情報である。否定命題を提出する以上は、話し手の心中にはすでに、先行情報と結びつく命題情報が用意されていることが多い。そのため、It is not that 節構文の直後にはそれに代わるべき関連命題がしばしば続くと考えられる。Quirk *et al.* (1985)で指摘された It is not that 節構文と相関性を示す It is that 節構文は、この代替命題の一つの表現形式をとらえたに過ぎないものと考えられる。たしかに実際の言語資料において、It is not that 節構文を用いて先行情報に関して予測される聞き手の解釈を打ち消した直後に、実際の解釈を話し手が提示する用例はしばしば観察される。

- (4) a. The blurb on your website trying to entice people to sign up for GCSE English language and literature might not be pulling in as many students as you would like. *It is not that* people don't want to learn "skills in writing accurately". *It's just that they might not value the opportunity "to practice" these skills at your college.* (*The Guardian*, Sep. 26, 2006)

(貴校はウェブサイトの誇大広告で、人々をそそのかして一般中等教育修了試験の言語と文学に契約させようとしています。貴校が希望するだけの数の学生を集めてはいないでしょう。人々は「正確に文章を書く技能」を修得したくないのではありません。ただこうした技能練習を貴校で行う機会を評価していません)

- b. When you grow old and your hair turns white, you may not be aware of what has happened to you. *It's not that* you are in denial, that you can't face reality, or anything like that. *It's just that you don't notice what everybody else notices.* (*The Guardian*, May 6, 2006)

(あなたが老けて白髪になったとき、何が起きたかわからないかもしれない。それは、あなたが認めるのを拒んでいるのでもなければ、現実といったものを直視できないのでもない。ただ、他のみんなが気づくことにあなたが気づかないだけなのだ)

- c. Bullet-proof front doors and steel security blinds sound like the must-have accessories for a high street bank rather than features of a swanky cliff-top villa overlooking an enticing sandy beach in Portugal's Algarve region. '*It's not that* there is a crime problem here, *it's just that people like this kind of security,*' says John Griffiths, [...].

(*The Observer*, July 2, 2006)

(防弾の表玄関と鉄製の目隠しは、ポルトガルの Algarve 地方の活気に満ちた砂浜を見下ろせるがけの上のしゃれた別邸ではなく目抜き通りに店舗を構える銀行の定番の付属品のように思われる。「この地に犯罪問題があるんじゃない。ただ、人々はこういった防衛手段が好きなんだ。」と John Griffiths は言う [...])

(4a-c)では *It is not that* 節構文の直後に *It's just that ...* という下線部の *It is that* 節構文が後続している。しかし、*It is that* 節構文だけが *It is not that* 節構文に後続するとは限らない。先に見た(1a)では *It is not that* 節構文の直後に、*he was actually a very nice, kind man* (父は実際にとってもやさしく親切な人でした) といった形で実情が示されている。さらに、次の例を観察しよう。*It is not that* 節構文に後続する下線部はいずれも *It is that* 節構文の形式をとってはいないが、先行情報と結びつく命題情報、つまり真相や解釈を表現している。

- (5) a. And be warned: if you buy out here, you could find it impossible to go back. *It is not that* you're trapped, but *the quality of life, from the wonderful regional cuisine to the countryside and the functional family life, make it very hard to forsake.* (*The Observer*, Nov. 5, 2006)

(そして、次のことに注意：ここで全部を買ってしまったら、もう元には戻れないことに気づくでしょう。あなたはわなにかかったのではありません。そうではなく、すばらしい地方料理から田舎の便利な家庭生活に至る生活水準のせいでそれらを捨てて元に戻りがたくなるのです)

- b. No wonder she seeks employment outside of Malawi - to go to South Africa, go to Europe, to Britain or to the US. *It is not that* she wants to leave, she has to. (Guardian Unlimited, Feb. 16, 2006)

(彼女が Malawi から出て、南アフリカ、ヨーロッパ、イギリス、アメリカといったところへ行き、職を求めるのは不思議ではない。彼女は出たがっているのではなく、出なければならないのだ)

- c. Philip Roth rarely gives interviews, and I quickly find out why. *It is not that* he is unpleasant or rude; he just cannot be bothered with answering the same questions, over and over again. (The Guardian, Dec. 14, 2005)

(Philip Roth はめったにインタビューに応じないが、私にはその理由はすぐにわかる。彼が感じが悪かったり、無作法なのではない。ただ彼は同じ質問に何度も何度も答えるのが面倒くさいだけなのだ)

以上の観察から明らかなように、It is not that 節構文は先行する事柄に関する聞き手の誤った解釈を予測して打ち消すと同時に、その事柄について成り立つ解釈や真相を話し手が伝達する点に特徴がある。次に概観する Not that 節構文も、先行する事柄に関する聞き手の誤った解釈を予測して否定するという点では It is not that 節構文と共通の意味特性をもつ。しかし、It is not that 節構文のように聞き手の解釈を打ち消した直後に真の解釈を提示する用法に加えて、念のために聞き手の誤解の可能性を打ち消しておくだけの用法も Not that 節構文が有する点に注意する必要がある。次に示す(6)の Not that 節構文は先行する事柄に関して予測される聞き手の解釈を否定すると同時に、後続する談話に真の解釈を伴っている。一方、(7)の Not that 節構文は先行する事柄に関する聞き手の誤った解釈を予測して打ち消してはいるが、真の解釈や実情を後続させていない。

- (6) Except for the sling routine — they hadn't bothered to try that on him again.

*Not that* it mattered. *Nor that* anything they did mattered. Because nothing they did was going to work — of that Peter was certain. They could run him, pummel him, and sling him hither and you until the cows came home and it wouldn't change things. (T. Brooks, *Hook*)

(骨が折れる日常の仕事以外には、彼らはそのような悪事を彼にわざわざ再びやってみようとすることはなかった。そのことが問題になったのでもなければ、彼らがやったことが問題になったのでもなかった。だって彼らがやったことは何ひとつうまくゆかなかったのだから。Peter はそう確信していた。彼らは牛が戻るまで彼を追いかけたり、こぶしで殴ったり、石をぶついたりできただろうが、そんなことをしたとしても状況は何も変わらなかつたろう)

- (7) “I was thinking of going in there myself, but the word is that Bingham is in a foul mood. *Not that* that’s so out of the ordinary.” (R. Cook, *Blindsight*)  
 (「私はそこに一人でいこうと考えていましたが、うわさでは Bingham は機嫌が悪いとのこと。もっともそんなのは珍しいのではないのですが」)

(6)の *Not that* 節構文は新しい段落の冒頭に生じており、先行段落の事柄について予測される聞き手の解釈を打ち消したうえで真相を披瀝している。このような段落の冒頭で使用される *Not that* 節構文は、聞き手に念頭に成立すると予測される解釈を十分な根拠をもって打ち消さなければならないほど情報価値の高い否定命題を表していると考えられる。一方、(7)のような発話の結びに用いられる *Not that* 節構文は否定の根拠や真の解釈を追記しないのであるから、話し手は予想される聞き手の誤解を念のために先回りして打ち消していると考えられる。さて、*Not that* 節構文は *It is not that* 節構文の主題要素 *it* と *is* が省略された形式であると考えられる。主題要素の省略が基本的に許されない英語においては *Not that* 節構文は有標な構文である。*Not that* 節構文が主題要素を表面に出さないのには積極的な語用論的要請がかかわっていると考えられる。大竹 (1994)で考察したように、*It is that* 節構文および *It is not that* 節構文の主題要素 *it* は先行情報が話し手の知識の蓄積に取り込まれていることを積極的に表示する指示表現である。そのため、*It is not that* 節構文は先行する事柄に関して予測される聞き手の解釈を打ち消すのに先立ち、その事柄を話し手が認知レベルですでに十分に情報処理済みであることを積極的に合図する。そのため、*It is not that* 節構文が用いられる談話では、予想される誤解を打ち消すだけにとどまらず、聞き手には容易には知りたいが話し手の念頭ですでに成立しているような真の解釈や実情もしばしば表現されると考えられる。他方、*Not that* 節構文は先行情報が話し手の知識の蓄積に取り込まれていることを積極的に合図する主題要素の *it* を表示しない。これは、*Not that* 節構文の話し手が、先行する事柄を念頭で十分に情報処理をしているといった含み、つまり聞き手には容易には知りたいような真の解釈や真相を想定したうえで聞き手の解釈を打ち消すという含意を避けるためであると考えられる。したがって、*Not that* 節構文は、念のために聞き手の誤解の可能性を打ち消しておくだけの場合にも発話されると思われる。*Not that* 節構文の文頭の *it is* が表出されない現象を情報構造の観点から説明すれば、*Not* を文頭という聞き手の関心を最も引き付けやすい位置に立たせることで先行情報と *that* 節内の命題情報との結びつきを直ちに打ち消すという機能が派生する。

本節では Otake (2002)、大竹 (1994; 2003; 2007)に基づいて、*It is that* 節構文と *Not that* 節構文の意味と談話機能の相違について概観した。上記の諸例に付した日本語から明らかのように、*It is not that* 節構文と *Not that* 節構文は日本語の「のではない」構文と対応関係を示す。次節では、「のではない」構文の諸特性を明らかにしながら、先行する事柄に関して予測される聞き手の解釈を打ち消す日英語の同種の構文を比較対照する。

### 3. {It is not that / Not that}節構文と「のではない」構文

「のだ」構文の否定形である「のではない」構文は、基本的に「のだ」構文の意味と機能を継承している。田野村 (1990)では、「のではない」構文は「あることがら $\alpha$ を受け、それは $\beta$ ということではない、その背後にある事情は $\beta$ ということではないと述べたり、問題となっている実情は $\beta$ ということではないと述べたりするのに用いられ」、「この否定の背後には、不適當な $\beta$ に代わるべき命題 $\beta'$ がしばしば予定されている」と説明されている。次の例を観察しよう。

- (8) a. A: 家を買ったんですか?  
 B: いいえ、家を買ったんじゃないありません。土地を買ったんです。(田野村 1990)  
 b. おそらく、著者はそこまで考えてこの文句を引用したのではない。(ibid.)

(8a)では家を買ったのかどうかという相手の問いかけを受けて、実情は家を買った( $\beta$ )のではなく土地を買った( $\beta'$ )のであると述べられている。(8b)では「著者はそこまで考えてこの文句を引用した」という不適當な $\beta$ に代わるべき $\beta'$ が明示されていないが、文脈や常識から「あまり考えずに引用したのだ」といった $\beta'$ が背後にあると田野村 (1990)は分析する。「のではない」構文に対する田野村 (1990)の説明は、英語の *It is that* 節構文と *Not that* 節構文にも適用できるように見えるかもしれない。たしかに、すでに観察したように *It is that* 節構文と *Not that* 節構文に付した日本語訳から明らかなように、それぞれは「のではない」構文とある程度の対応関係がある。また、「のではない」構文の肯定形である「のだ」構文に関する先行研究においては、*It is that* 節構文はその英訳として言及されてきた (Kuno 1973; 池上 1981; 野田 1997)。しかし、「のではない」構文と {*It is not that / Not that*} 節構文とは使用条件が異なる点に注意する必要がある。

まず、「のではない」構文と {*It is not that / Not that*} 節構文はどちらも同一話者の発話中の先行する事柄を受けて使用され得るという点では共通性がある。(9)-(10)の *It is that* 節構文と、(11)-(13)の *Not that* 節構文および対応する「のではない」構文はいずれも同じ話し手によって発話された内容を契機として発話されている。

- (9) a. That spirit seemed to have dissipated by the end of the decade. *It is not that* we were not successful. We were. But that success comes and takes people away. (The Times Magazine, Oct. 16, 1993)  
 b. その気概は 10 年間の終わりまでに消えてしまったように思える。私たちは成功しなかったのではない。実際には成功はしたのだ。しかし、その成功ゆえに人々が離れてしまうのだ。
- (10) a. His grace, his quick eyes, the muscles along his forearms working. [...] *It wasn't that* he hurried. In fact, he didn't hurry at all. (R. J. Waller, *The Bridges of Madison Country*)  
 b. 彼の上品さ、目ざとさ、前腕筋の動き。[...] 彼は急いでいたのではない。彼は実際に急いでいなかったのだ。

- (11) a. She hasn't written to me yet — *not that* she ever said she would.  
(*Oxford Advanced Learner's Dictionary* <sup>5)</sup>)  
b. 彼女はまだ私に手紙を書いてこない。もっとも彼女が手紙を書くと言ったのではないけれども。
- (12) a. Where were you last night? *Not that* I care, of course.  
(*Longman Dictionary of Contemporary English* <sup>4)</sup>)  
b. あなたは昨夜どこにいたのですか？もちろん気にしているのではありませんが。
- (13) a. They had vanished before I ever got to the customs shed. *Not that* it mattered much.  
(*Collins COBUILD English Dictionary* <sup>2)</sup>)  
b. それらは私が税関倉庫に到着する前になくなっていました。と言っても大したことだったのではないですが。

上記のように、「のではない」構文と{It is not that / Not that}節構文が同一話者の発話した事柄を受けて使用されるという共通の側面が観察される。しかし、{It is not that / Not that}節構文とは異なり、「のではない」構文は発話の契機となる先行情報が話し手以外の人物によって提示されてもよいという重要な相違点がある。

- (14) a. [Bがアイスクリームに手をつけない様子を見たAの発話]  
A: アイスクリームは嫌いなんですか？  
B: いえ、嫌いなんじゃありません。ただ減量中なんです。
- b. A: Do you hate ice cream?  
B: No. {I don't hate ice cream / \**It's not that* I hate ice cream / \**Not that* I hate ice cream}. I'm just dieting.

(14a)の話し手Bの「のではない」構文は先行する話し手Aの発話を契機として発せられている。このように、「のではない」構文の発話の契機となる先行情報は話し手あるいは話し手以外によって当該談話に提示されてもよい。しかしながら、(14b)の{It is not that / Not that}節構文の非容認可能性から明らかなように、{It is not that / Not that}節構文の話し手と発話の契機となる先行情報の話し手とが基本的に異なることはできない。

次に、「のではない」構文は場面的状況を受けて発話され得るが、{It is not that / Not that}節構文は言語的文脈を受けなければ発話されないという点で異なる

- (15) a. [落書きを見つけた母親が話し手に視線を向ける場面]  
僕が書いたんじゃないよ。
- b. [お化け屋敷に入るときに身震いする様子を聞き手に見つかってしまう場面]  
怖いんじゃないよ。寒くてちょっと震えただけだよ。

(15a-b)では「のではない」構文の発話の契機となる情報は言語化されてはいない。当該場面の状況から相手の念頭に成立すると予測される解釈が打ち消されている。例えば、(15a)では



母親の疑いの眼差しから予測される「僕が落書きをした」という解釈や、(15b)では身震いから連想される「私が怖がっている」という解釈が否定されている。一方、{It is not that / Not that}節構文はこうした環境では使用されない。

- (16) a. [落書きを見つけた母親が話し手に視線を向ける場面]  
 {I didn't do it / \*It's not that I did it / \*Not that I did it}.
- b. [お化け屋敷に入るときに身震いする様子を聞き手に見つかってしまう場面]  
 {I'm not terrified / \*It's not that I'm terrified / \*Not that I'm terrified}.

このように、{It is not that / Not that}節構文は発話の契機となる情報が言語化されていなければならない。

さらに、「のではない」構文には禁止を表現する用法があるという点で{It is not that / Not that}節構文とは異なる。田野村 (1990)は次のような用例を引き合いに出して「のではない」構文の禁止を表す用法を説明している。

- (17) a. 変なことを言うんじゃない。(田野村 1990)  
 b. 最後まで気を抜くんじゃないよ。(ibid.)

田野村 (1990)は、(17-b)の「のではない」構文の禁止を表す用法は固定慣用化した特別な用法とすべきであろうと説明している。{It is not that / Not that}節構文にはこのような「のではない」構文の禁止を表す用法に相当する用法はない。

- (18) A: You like her, eh?  
 B: {Don't be silly / \*It's not that you're silly. / \*Not that you're silly}!

(18)が示すように、話し手 A の「彼女に気があるんでしょ (You like her, eh?)」という発話を受けて、「変なこと言うんじゃない」と話し手 B がその発話を禁止するときに Don't be silly! は自然であるが、{It is not that / Not that}節構文は不自然である。

ところで、従来の研究において「のではない」構文は代替命題を必要とすることが指摘されている。たとえば、田野村 (1990)では「「のではない」においては、拒絶される  $\beta$  に代わる  $\beta'$  の存在が必ず予定されていなければならない」と説明されている。次の例を考えよう。

- (19) A: 君、この機械の使い方を知っているか?  
 B: ?いいえ、知っているんじゃないありません。(田野村 1990)

田野村 (1990)によれば、(19)のような「知っている」が  $\beta$  である場合には、それに代わるべき  $\beta'$  を想定しがたいために「のではない」構文は用いがたいと分析する。では、「知っているのではない」が不自然なように、英語の It is not that I know.、Not that I know.といった英語構文は不自然なのであろうか。筆者の手元の言語資料には It is not that I know. というデータは(20)の 1 例のみしかない。

## (20) Q. What does it mean to understand? Thay smiles.

I have not been speaking, and hardly thinking, being very much in the here and now, and walking very slowly for three days, eating in silence. In the paying attention, in the walking, I am practicing engaged Buddhism. And I am beginning to understand. *It is not that I know, it is that I understand.* Understanding resides in a place outside of knowing - between steps - going nowhere, being peace.

(<http://layogamagazine.com/issue11/departments/thichnhathanh.htm>)

(20)ではヨガ実践者 Thay が *It is not that I know, it is that I understand.* (私は知るのではなく、悟るのである) と発話している。この例の *It is not that I know.* では動詞 know の状態性が希薄化され、心的作用としての know (知る) が同じく心的作用を表す understand (悟る) と対照的にとらえられている。その証拠に次行では「悟るということは知ることの外に存在する (Understanding resides in a place outside of knowing)」と、understanding と knowing の対照性が述べられている。「知っている」という状態に代わるべき状態を想定することは難しいように思われる。しかしながら、understand (悟る) と対照されて know (知る) という心的な作用を表すような場合に限り、(20)のように *It is not that I know.* の容認度は高くなると考えられる。

一方、I know を補文に従える Not that 節構文に関しては実際の言語資料の中に多くのデータが存在する。

(21) It wouldn't have happened in Russia. *Not that I'd know.*

(*The Observer*, Dec. 18, 2005)

(21)の Not that 節構文では「知っている (I'd know)」という命題が打ち消されている。日本語の「知っているのではない」が不自然であるという事実と照合すると、Not that I know. と対応するのはどのような日本語表現であろうか。(21)では、「そんなことはロシアで起こらないでしょう」という話し手の判断に対して、Not that 節構文を用いて「知っているわけではないが」と話し手はその判断が現在の知識に基づくものではないという事情を付加している。また、次に示す(22a-b)は後続する内容に対して、「知っているわけではないが」と前置き表現として Not that 節構文が用いられている興味深い例である。たとえば、(22a)では「もっとも、知っているわけではありませんが」と Not that 節構文で前置きをして、後続する「彼がそんなやり方ですとは思えません」という自分の見解が現在の知識に基づくものではないという事情を伝えている。

(22) a. They'd say, '*Not that I know, mind you, but I don't think he would do it like that. He wouldn't use the knife like that or hold the gun that way.*'

(*The Observer*, Feb. 20, 2000)

b. "Was there - blood?" asked Madame Goesler, [...]. "*Not that I know. I don't suppose they've looked yet.*"

(A.Trollope, *Phineas Redux*)

このような Not that I know. という Not that 節構文は「のではない」構文とは対応しがたい。(23a-c)は(21)、(22a-b)に対応すると考えられる日本語である。

- (23) a. そんなことはロシアでは起こらないでしょう。知っている{わけではありませ  
ん / \*のではありません}が。
- b. 「もっとも、知っている{わけではありませぬ / \*のではありません}が、彼が  
そんなやり方ですとは思えませぬ。彼はナイフをそんな風に使いませぬし、  
銃をそのように持ったりしないと思ひます。」と彼らは言うでしょう。
- c. 「血があつたの？」と Goesler 婦人が尋ねた [...]。「知っている{わけではあり  
ませぬ / \*のではありません}が、彼らがもう見てしまったとは思ひませぬ。」

「わけではない」は、聞き手が前後の内容から当然のこととして予想するであろう解釈を否定する。

- (24) a. イタリア語を解するわけじゃないが、オペラが好きだ。 (『明鏡国語辞典』)
- b. 口調は激しいが、何もけんかをしてわけではない。 (ibid.)

「のではない」が話し手の知識に基づいて確定する情報を打ち消すのに対して、「わけではない」は「訳」すなわち道理や筋道に基づいて確定する情報を打ち消すという意味の相違がある。(22)-(23)に示すように Not that 節構文は「のではない」構文にとどまらず、「わけではない」構文にも対応することが明らかである。

さて、「のではない」構文の「は」は対照を表す格助詞であると考えられる。従来の研究においては、なぜ「\*のでない」ではなく、「のではない」と「は」を立てた形で定着しているのかは十分に考察されてこなかったように思われる。対照を表す「は」が「のだ」構文の否定に付くのは、ある先行情報に対してすでに定まっている情報を否定する以上、話し手の側に代わりとなるべき情報を発話に先立って用意していることを強く予想させる結果であると考えられる。ただし、そうした対照性の含みを意図的に避ける場合には「は」が弱化された「んじゃない」のような形式がしばしば用いられると仮定される。<sup>1</sup>日本語の「のではない」構文が他の命題と対照する意識のもとで発話されるとき、格助詞「は」が重要な役割を果たす。一方、対照を表す格助詞をもたない英語においては、話し手は語順や強勢により対照性を表現する必要がある。そのため、英語の It is not that 節構文や Not that 節構文は通例 not に対照強勢が置かれて発話される。また、日本語の「のではない」構文の名詞節化詞「の」はその節内の命題情報を積極的に既定化する働きをする補文標識である。「のではない」構文がくだけた会話などでは「んじゃない」のようにしばしば「の」が「ん」に弱化される現象が生ずる。これは、相手の解釈を予測して打ち消すに際して、話し手と聞き手と優劣関係に結びつき得る情報所有のギャップをできる限り表面化させない話し手の心的態

<sup>1</sup> 先に見た(17)のような禁止を表す用法では「変なことを言うんじゃない」は自然であるが、「は」を表示する「変なことを言うのではない」はやや不自然である。これは、禁止を表す場合には、他の命題との対照を合図するという意識が希薄になる表れであると考えられる。

度の表れとみることができる。予測される相手の解釈を否定する際に、こうした情報所有のギャップを表面化させない配慮は英語においても観察できる。主題要素の表示が必要な英語において、It is not that 節構文は先行情報が既獲得情報であることを積極的に合図する it を主題に立てることで、結果的に that 節内に既定情報を提出する。It は先行情報が話し手の念頭では十分に情報処理を受けているが、聞き手には容易には知りがたいという含みをもつ。本研究で論じてきた Not that 節構文の主節部が意図的に表現されないのは、聞き手との情報所有の隔たりや知識の優劣を表面化しないという話し手の心的な態度の表れであると考えられる。

#### 4. まとめ

本研究では{It is not that / Not that}節構文と「のだ」構文の否定形である「のではない」構文との比較対照を通して、日英語の否定構文の共通性と個別性を考察した。{It is not that / Not that}節構文と「のではない」構文はある程度の類似性を示すが、それぞれに異なる使用条件があることを確認した。日本語の「のではない」構文では名詞節化機能を担う補文標識「の」が「の」節内の命題情報を直接的に既定化したうえで先行情報との関連性を打ち消す。一方、英語の{It is not that / Not that}節構文では先行情報を主題の it で指示することで既定的に表示したうえで that 節内の命題情報との関連性を否定する。このような情報の既定化のメカニズムの異同が{It is not that / Not that}節構文と「のではない」構文の類似性と個別性に関わっていると考えられる。

#### References

- Declerck, R. 1992. "The Inferential *It is that*-Construction and Its Congeners." *Lingua*. 87. 203-230.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』 東京: 大修館書店.
- Kuno, S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- 野田春美. 1997. 『「の(だ)」の機能』日本語研究叢書 9, 東京: くろしお出版.
- 大竹芳夫. 1994. 「The *NOT THAT* Construction in English」『言語文化論集』第 39 号, 37-55. 筑波大学現代語・現代文化学系.
- Otake, Y. (大竹芳夫) 2002. "Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction." In Ionin, T., H. Ko and A. Nevins eds., *MIT Working Papers in Linguistics*. Vol. 43, 143-157. Cambridge, Mass.: MIT, Department of Linguistics and Philosophy.
- 大竹芳夫. 2003. 「It is that 節構文の意味と談話機能: 「のだ」文との比較・対照」『英語青年』第 149 巻第 7 号, 436-437, 443, 東京: 研究社出版.
- 大竹芳夫. 2007. 「日英語の名詞節化構文の意味と機能: {It is that /S take it that}節構文と「のだ」構文」『英語と文法と』 65-77. 東京: 開拓社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 田野村忠温. 1990. 『現代日本語の文法 I : 「のだ」の意味と用法』 大阪: 和泉書院.

(2006年12月15日 受理)